

海況速報

平成10年度 第4号 (通算 No.64)
平成10年11月4日
北海道立水産試験場

内容についての問い合わせは

中央水試海洋部 0135-23-4020

9月下旬～10月上旬の海況

【日本海海域】

道北日本海の観測は日本海スケトウダラ共同調査終了後に行われるため、現在データが届いていません。

本道西岸には、積丹半島西方沖に暖水渦（中心：200m層水温3℃以上）が発達しています。北緯41度30分線上で100m層水温6℃の位置を見ると、前回（8月）は渡島大島付近にありましたが、今回はさらに西方にあり、対馬暖流の幅が広がっています。

水温について見ると、北緯43度30分線では、累年平均(*1)に比べ、石狩湾湾口部の表面で+1.0℃、50m層で-0.9℃、積丹岬北西沖定点の200m層で-1.1℃、100m層で-1.7℃、50m層以浅で+1.5～+1.7℃になっています。北緯42度30分線では、累年平均に比べ、瀬棚沖の最も岸寄りの定点の200m層で-0.2℃ですが、100m層で+0.2℃、50m層で+0.9℃、表面で+2.2℃と表面に近づくほどプラス傾向が大きくなっています。北緯41度30分線では、累年平均に比べ、最も岸寄りの定点の200m層で+0.5℃、100m層で+3.0℃、50m層で+2.0℃、表面で+1.2℃となっています。松前西方で最も岸寄りの定点（北緯41度20分、東経140度00分）では、累年平均に比べ、200m層で+3.0℃、100m層で+2.7℃、50m層で+0.8℃、表面で+0.2℃となっています。津軽半島西方の観測点（北緯41度00分、東経140度00分）では、100m以浅で1989年以降で最高値を示しています。また、北緯42度30分以南の海域では、約7割の観測点の表面で1989年以降で最高値を示しています。

余市における9月中旬以降10月下旬までの沿岸水温（旬平均）は、平年値に比べ、9月中旬の-1.0℃（「かなり低い」）から9月下旬に+0.4℃（「やや高い」）になりましたが、10月上旬に-0.1℃（「平年並み」）になり、10月下旬には+1.4℃（「かなり高い」）となっています。

【道東太平洋海域】

前回（8月）、北緯41度以北の海域に入り込んできた黒潮系の暖水は、その後暖水塊（中心域：北緯41度、東経144度30分～145度00分、200m層水温10℃以上）になりましたが、北へ移動せずに前回よりもやや西方に移動しています。道東沖の5℃以下の範囲は100m層では前回とほぼ同様ですが、50m層では道東沿岸部と北緯42度以南での昇温が進んだため、5℃以下の範囲が縮小しました。

水温について見ると、道東沿岸の50m層の最も岸寄り定点の水温は、累年平均に比べ、

白糠沖で+1.3℃、厚岸沖で+1.3℃、根室半島沖で+0.8℃となっています。東経145度以東で沿岸から20～40海里沖合にある観測点の表面では、1989年以降で最高値を示しています。

【道南太平洋海域】

道南太平洋海域では、例えば100m層水温10℃の等温線が、浦河南西観測線上で北緯42度以北に、また東方には東経143度以東の襟裳岬付近まで張り出していることから、津軽暖流は前回（8月）に引き続き渦モード(*2)になっています。100m以浅では海域全体に津軽暖流の影響が強い状態ですが、200m層では日高沿岸沿いに親潮の影響の強い水温4℃以下の水が前回よりも西に範囲を広げて白老沖まで達しています。

水温について見ると、累年平均に比べ、白老南方観測線では白老沿岸北緯42度10分の定点の200m層で-1.4℃、100m層以浅で+1.1～1.3℃、恵山岬東側定点の200m層で+0.1℃、100m層で+1.8℃、50m層で+2.5℃、表面で+0.5℃となっています。浦河南西観測線では、累年平均に比べ、浦河沿岸に最も近い定点の100m層で-0.6℃、50m層で+0.4℃、表面で+1.9℃となっています。白老南方観測線では50m層で、浦河南西観測線では主に表面でそれぞれ1989年以降最高値を示した観測点がいくつかあります。

【オホーツク海海域】

表面及び50m層では宗谷海峡東部から知床岬沖までの沿岸に沿って宗谷暖流（ここでは例えば50m層水温で14℃以上の範囲）が明瞭に見られます。また、50m層で3℃の等温線がオホーツク沿岸域に沿って沖合30海里くらいのところにあり、宗谷暖流と沖合にあるオホーツク海中冷水との間にある前線域の幅が例年になく広がっています。オホーツク海中冷水について見ると、50m層では最低水温が氷点下1℃以下の範囲が例年見られますが、今回最低水温が1℃台になっていて、例年よりも約2℃ほど高い状態にあります。

水温について見ると、累年平均に比べ、最も岸寄りの50m層水温は浜頓別沖では+1.9℃、紋別沖では+1.7℃、網走沖で+3.0℃、知床岬沖で+2.4℃となっています。紋別沖以東におけるこれらの値を示した50m層水温は、1989年以降では最高値となっています。

資 料 〔観測期間〕

青森水試 (東奥丸)	平成10年9月28日～同9月29日 (東北日本海海域)
稚内・網走水試 (北洋丸)	平成10年9月28日～同9月30日 (オホーツク海海域)
釧路水試 (北辰丸)	平成10年10月1日～同10月6日 (道東太平洋海域)
函館水試 (金星丸)	平成10年9月28日～同10月3日 (道南太平洋海域)
中央水試 (おやしお丸)	平成10年9月28日～同9月30日 (道西日本海海域)
中央水試 (おやしお丸)	平成10年10月6日～同10月7日 (道西日本海海域)

*1: 平成元(1989)年～平成9(1997)年までの平均値を使用しました。

*2: 津軽暖流が北海道沿岸近くまで大きく蛇行してから三陸方向へ流れる状態を、津軽暖流の「渦モード」と呼んでいます。

(中央水試 海洋部)

海況速報

平成10年度 第4号 (通算 No.64b)
平成10年11月26日
北海道立水産試験場

内容についての問い合わせは

中央水試海洋部 0135-23-4020

9月下旬～10月上旬の海況、 10月下旬の海況（道北日本海を追加）

【日本海海域】

日本海スケトウダラ共同調査終了後、10月下旬に例年よりも約3週間遅くなりましたが、道北日本海の観測を行ったので、その分を追加します。

道北日本海の対馬暖流は、武蔵堆の西側で流路を狭めて北上しています。礼文島北西に接するように暖水渦（中心：200m層水温4℃以上）があるようです。

水温について、表面では水温の下降する度合いが大きい時期に観測時期が遅れてしまったために、累年平均(*1)と比較ができないので、表面を除いた比較をします。北緯44度30分線では、累年平均に比べ、東経141度00分以東の天売・焼尻島北側では、100m層で-0.9～+0.5℃、50m層で+1.4～+2.5℃となっています。北緯45度30分線では、累年平均に比べ、礼文島北西定点、東経140度53分では200m層で+0.6℃、100m層で+2.0℃、50m層で+1.1℃、東経141度10分以東では、100m層で+0.6～+1.5℃、50m層で+0.7～+1.0℃となっています。また、最も沖合の定点について見ると、北緯44度30分線では、累年平均に比べ、200m層で-0.9℃、100m層で-2.7℃、50m層で-4.9℃、北緯45度30分線では、累年平均に比べ、200m層で-0.6℃、100m層で-1.9℃、50m層で-3.9℃となっています。

（以上追加分）

本道西岸には、積丹半島西方沖に暖水渦（中心：200m層水温3℃以上）が発達しています。北緯41度30分線上で100m層水温6℃の位置を見ると、前回（8月）は渡島大島付近にありましたが、今回はさらに西方にあり、対馬暖流の幅が広がっています。

水温について見ると、北緯43度30分線では、累年平均に比べ、石狩湾湾口部の表面で+1.0℃、50m層で-0.9℃、積丹岬北西沖定点の200m層で-1.1℃、100m層で-1.7℃、50m層以浅で+1.5～+1.7℃になっています。北緯42度30分線では、累年平均に比べ、瀬棚沖の最も岸寄りの定点の200m層で-0.2℃ですが、100m層で+0.2℃、50m層で+0.9℃、表面で+2.2℃と表面に近づくほどプラス傾向が大きくなっています。北緯41度30分線では、累年平均に比べ、最も岸寄りの定点の200m層で+0.5℃、100m層で+3.0℃、50m層で+2.0℃、表面で+1.2℃となっています。松前西方で最も岸寄りの定点（北緯41度20分、東経140度00分）では、累年平均に比べ、200m層で+3.0℃、100m層で+2.7℃、50m層で+0.8℃、表面で+0.2℃となっています。津軽半島西方の観測点（北緯41度00分、東経140度00分）では、100m以浅で1989年以降で最高値を示しています。また、北緯42度30分以南の海域では、約7割の観測点の表面で1989年以降で最高値を示しています。

余市における9月中旬以降10月下旬までの沿岸水温（旬平均）は、平年値に比べ、9月中旬の-1.0℃（「かなり低い」）から9月下旬に+0.4℃（「やや高い」）になりましたが、10月上旬に-0.1℃（「平年並み」）になり、10月下旬には+1.4℃（「かなり高い」）となっています。

【道東太平洋海域】

前回（8月）、北緯41度以北の海域に入り込んできた黒潮系の暖水は、その後暖水塊（中心域：北緯41度、東経144度30分～145度00分、200m層水温10℃以上）になりましたが、北へ移動せずに前回よりもやや西方に移動しています。道東沖の5℃以下の範囲は100m層では前回とほぼ同様ですが、50m層では道東沿岸部と北緯42度以南での昇温が進んだため、5℃以下の範囲が縮小しました。

水温について見ると、道東沿岸の50m層の最も岸寄り定点の水温は、累年平均に比べ、白糠沖で+1.3℃、厚岸沖で+1.3℃、根室半島沖で+0.8℃となっています。東経145度以東で沿岸から20～40海里沖合にある観測点の表面では、1989年以降で最高値を示しています。

【道南太平洋海域】

道南太平洋海域では、例えば100m層水温10℃の等温線が、浦河南西観測線上で北緯42度以北に、また東方には東経143度以東の襟裳岬付近まで張り出していることから、津軽暖流は前回（8月）に引き続き渦モード(*2)になっています。100m以浅では海域全体に津軽暖流の影響が強い状態ですが、200m層では日高沿岸沿いに親潮の影響の強い水温4℃以下の水が前回よりも西に範囲を広げて白老沖まで達しています。

水温について見ると、累年平均に比べ、白老南方観測線では白老沿岸北緯42度10分の定点の200m層で-1.4℃、100m層以浅で+1.1～1.3℃、恵山岬東側定点の200m層で+0.1℃、100m層で+1.8℃、50m層で+2.5℃、表面で+0.5℃となっています。浦河南西観測線では、累年平均に比べ、浦河沿岸に最も近い定点の100m層で-0.6℃、50m層で+0.4℃、表面で+1.9℃となっています。白老南方観測線では50m層で、浦河南西観測線では主に表面でそれぞれ1989年以降最高値を示した観測点がいくつかあります。

【オホーツク海海域】

表面及び50m層では宗谷海峡東部から知床岬沖までの沿岸に沿って宗谷暖流（ここでは例えば50m層水温で14℃以上の範囲）が明瞭に見られます。また、50m層で3℃の等温線がオホーツク沿岸域に沿って沖合30海里くらいのところにあり、宗谷暖流と沖合にあるオホーツク海中冷水との間にある前線域の幅が例年になく広がっています。オホーツク海中冷水について見ると、50m層では最低水温が氷点下1℃以下の範囲が例年見られますが、今回最低水温が1℃台になっていて、例年よりも約2℃ほど高い状態にあります。

水温について見ると、累年平均に比べ、最も岸寄りの50m層水温は浜頓別沖では+1.9℃、紋別沖では+1.7℃、網走沖で+3.0℃、知床岬沖で+2.4℃となっています。紋別沖以東におけるこれらの値を示した50m層水温は、1989年以降では最高値となっています。

資 料 〔観測期間〕

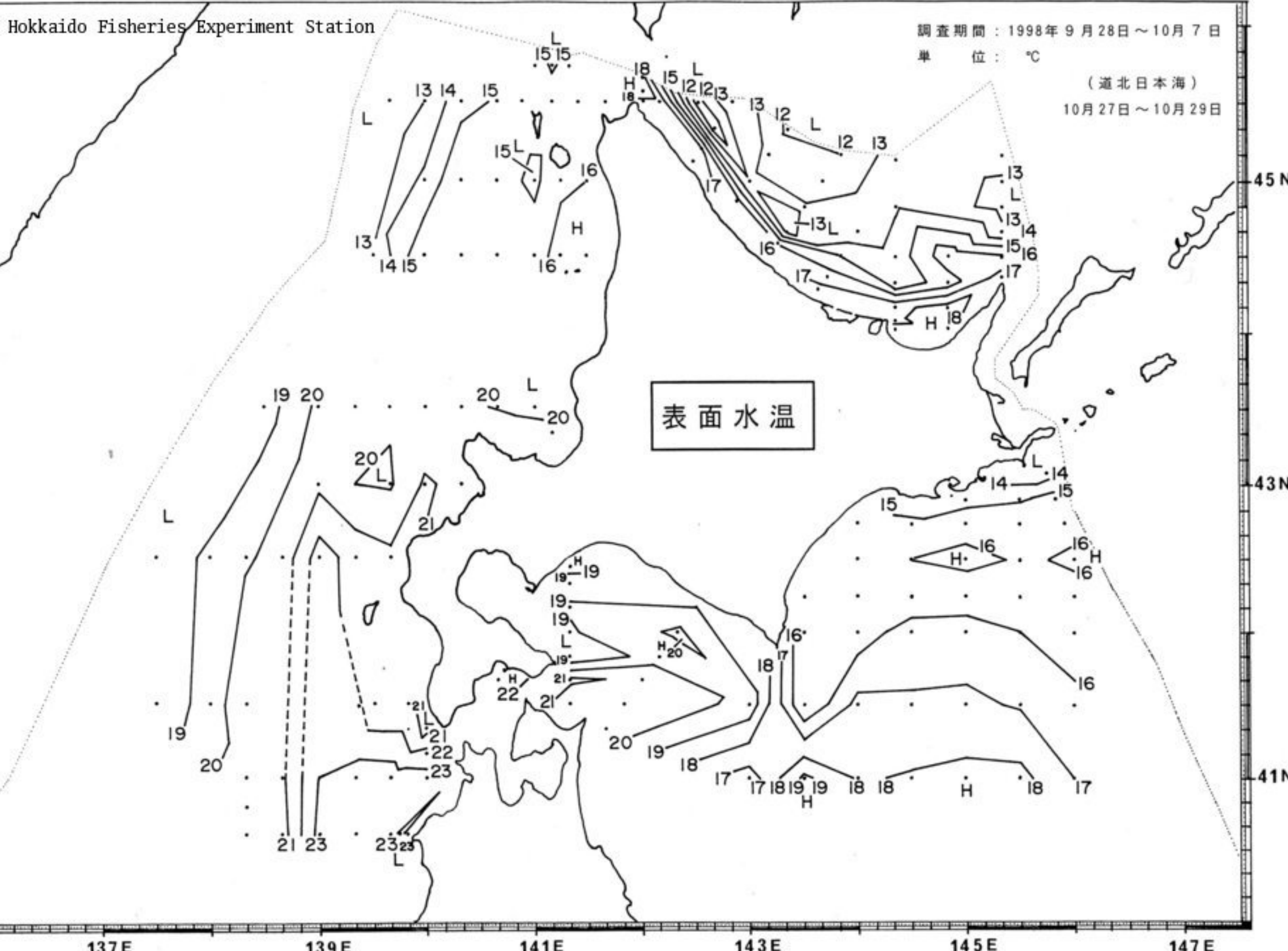
青森水試（東奥丸）	平成10年9月28日～同9月29日（東北日本海海域）
稚内・網走水試（北洋丸）	平成10年9月28日～同9月30日（オホーツク海海域）
稚内水試（北洋丸）	平成10年10月27日～同10月29日（道北日本海海域）
釧路水試（北辰丸）	平成10年10月1日～同10月6日（道東太平洋海域）
函館水試（金星丸）	平成10年9月28日～同10月3日（道南太平洋海域）
中央水試（おやしお丸）	平成10年9月28日～同9月30日（道西日本海海域）
中央水試（おやしお丸）	平成10年10月6日～同10月7日（道西日本海海域）

*1: 平成元(1989)年～平成9(1997)年までの平均値を使用しました。

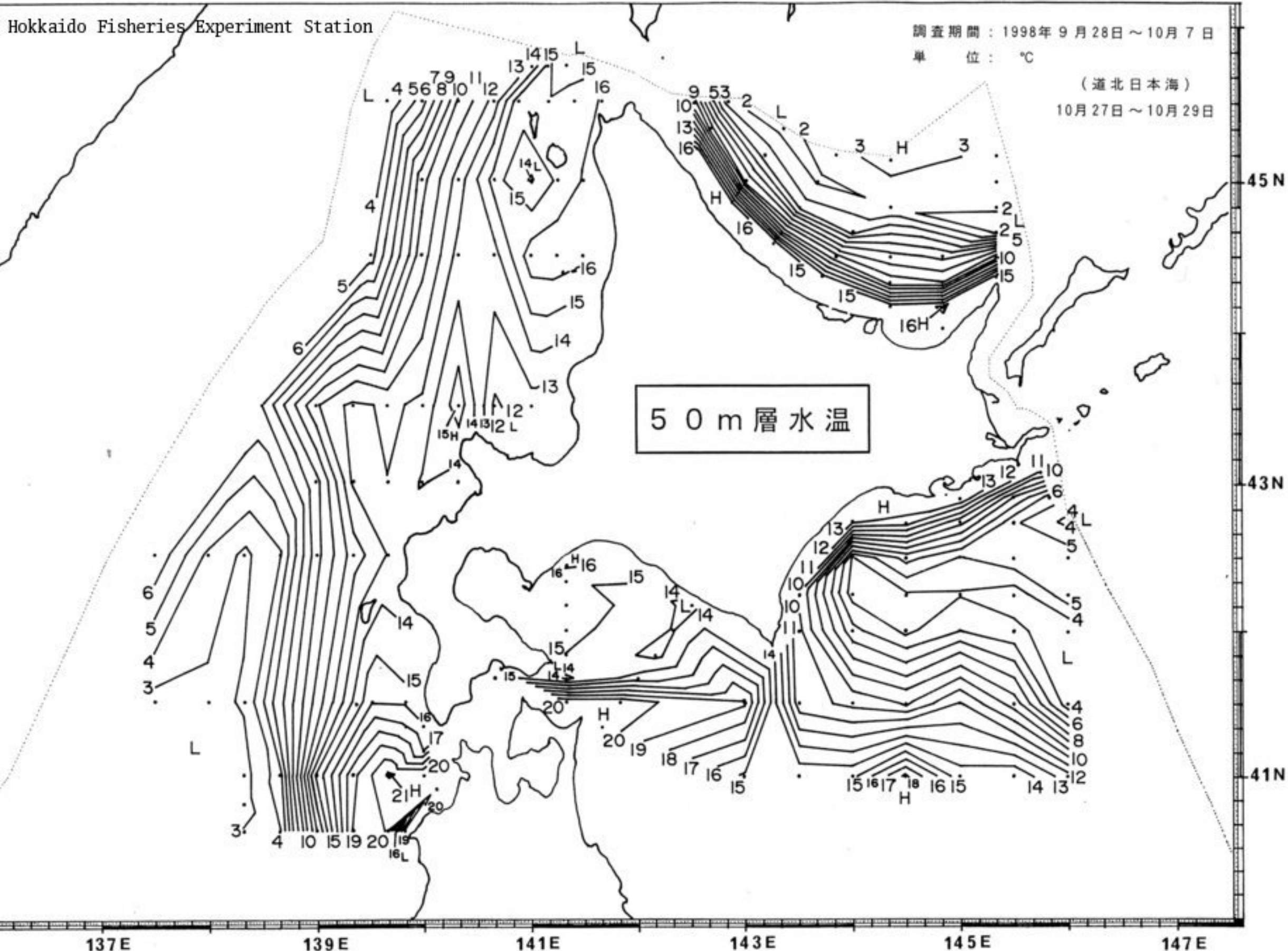
*2: 津軽暖流が北海道沿岸近くまで大きく蛇行してから三陸方向へ流れる状態を、津軽暖流の「渦モード」と呼んでいます。

(中央水試 海洋部)

表面水温



50 m 層水温



137E

139E

141E

143E

145E

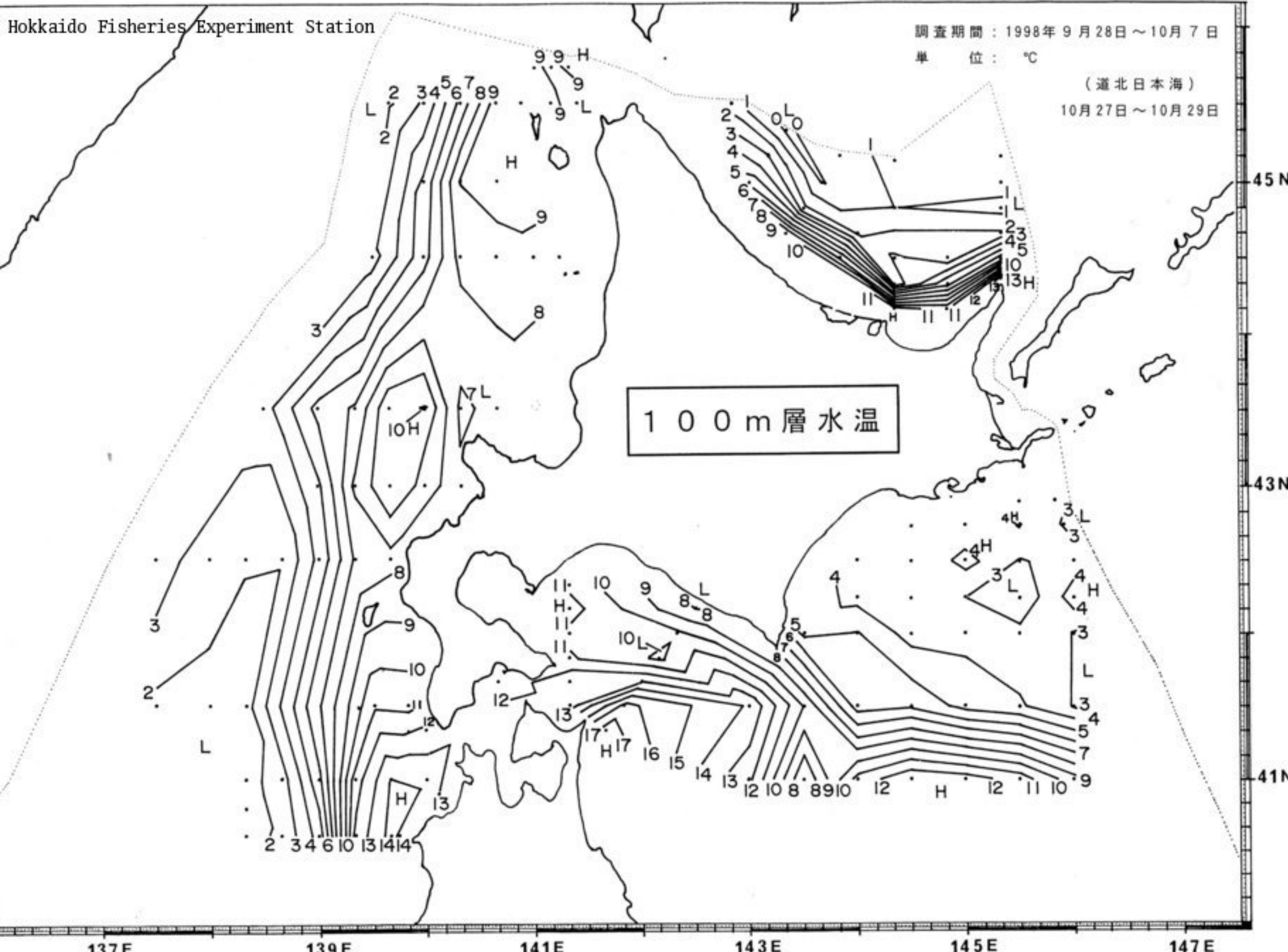
147E

45N

43N

41N

100m層水温



137E

139E

141E

143E

145E

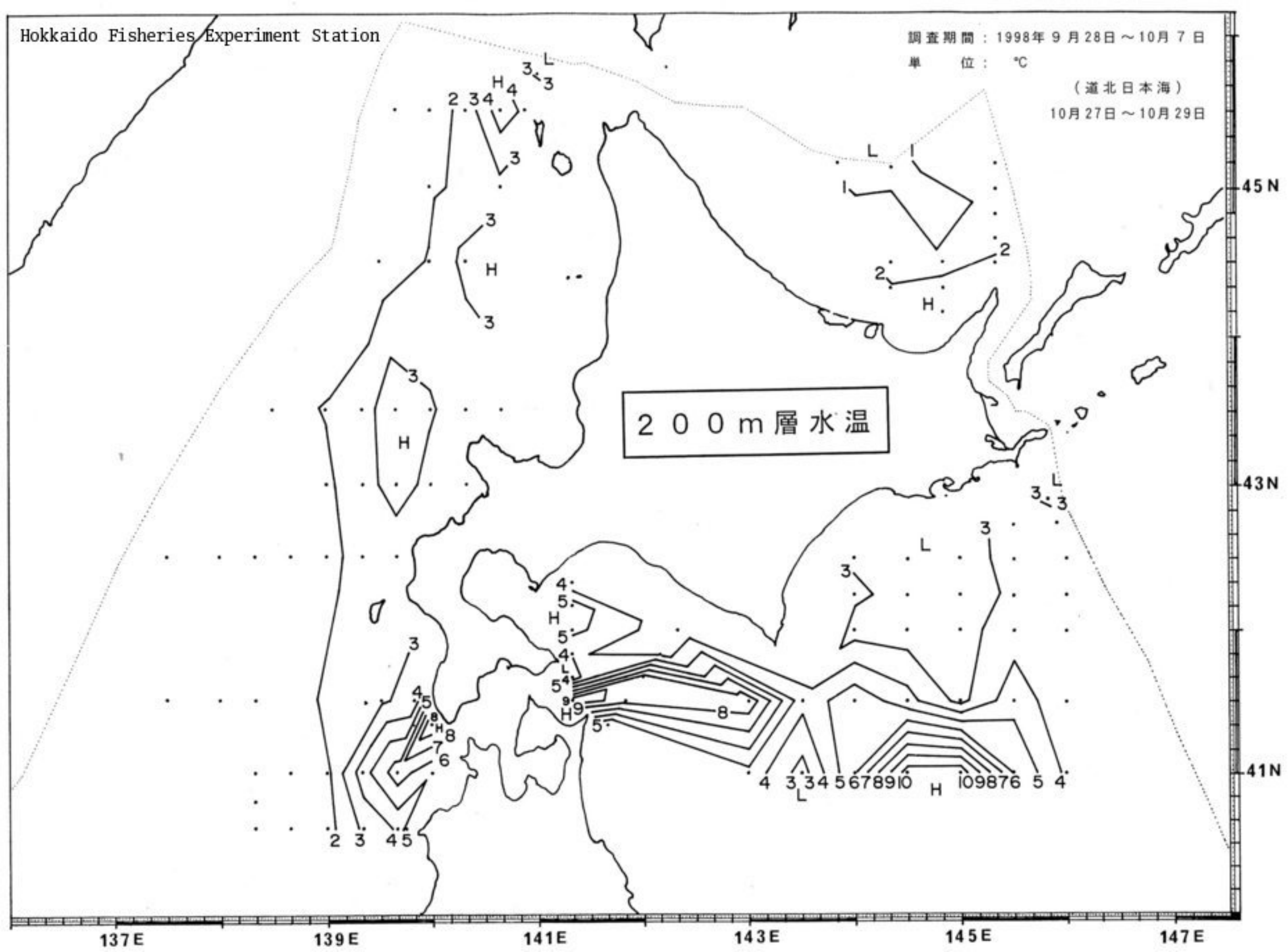
147E

45N

43N

41N

200m層水温



137E

139E

141E

143E

145E

147E

45N

43N

41N